



—第十想—

しかつた時代を歯をくいしばつて
耐え、今日を築かれた先人の苦労
をともすれば忘れがちになる。
しかし今日の繁栄が当たり前で
はないのだ。

顧みて自分の生涯が辛ければ辛
いほど、せめて子供には幸多い生
活を譲りたいと親は思う。それは
今日の自分を思う心ではなく、子
供の明日を願う心なのだ。そして
その心こそが、今日の豊かさを築
き上げた原点であろう。

詩人 三好達治に「木守り（き
まもり）」という短い隨筆がある。

本を読んで涙がこぼれたのは久
しぶりであった。

昨年11月下野新聞社から刊行さ
れた「とつておきいい話」の中に、
本町の田代ユキエさんの「みんな
みんなありがとう」という文章が
載っている。貧しさの中で進学を
あきらめていた末妹を援助してくれ、義妹の卒業を見届けるように
34歳で逝ったご主人、そして今で
もその恩を忘れずに涙を流して手
を合わせる妹。夫亡き後、教員と
して家計を支えながら小学3年、
小学1年の男児2人を育てあげる
までの母の協力、祖母の愛情と孫
の感謝の姿。そこには、つましく
も優しい家族の情景があり、感動
せすにはいられなかつた。

日本は確かに豊かになつた。高
根沢町ももちろん豊かになり、貧

り尽くさず、枝先に2つ3つ取り
残しておくことを木守りというの
だそうである。人間が取つたのち、
山のケモノたちや鳥が食べるため
なのか、それとも他に合理的な理
由があるのかどうかは分からない
が、三好達治はその姿とともにそ
うする人間の心ばえをも「美しい」
と評している。

時代は今大きな曲がり角に立つ
ていいと思う。「衣食足りて礼節
を知る」とは、齊の垣公に仕えた
名宰相管仲の言葉だが「衣食足り
過ぎて礼節を忘れる」とも言える
のではないか。

人の幸せとそれを支える地域の
あり様とは何なのか。私には、田
代さんの文章や「木守り」の中に、
そのことを考える上での小さいが
大きなヒントがあるように思えて

ならない。そしてその事に気付く
ことこそがミレニアムとしての西
暦2000年なのではないだろう
か。

町長記

